

# 壬辰倭乱の学説史的検討

—韓国の研究を中心に—

盧永九\*

## 序論

- I. 解放～1950年代の国難克服史観の台頭と壬辰倭乱
- II. 1960～1970年代の民主主義の流れと壬辰倭乱
- III. 1980～1990年代の新たな壬辰倭乱認識の台頭
- IV. 2000年代の新たな壬辰倭乱像の構築の努力と挑戦  
おわりに

## 序論

16世紀末、日本の朝鮮侵略で始まった壬辰倭乱は、その後朝鮮の要請により明が援兵を送り参戦したことで東北アジア地域の国際戦争に拡大・発展した。この戦争は、東北アジア地域の覇権を占めていた明と、明の主要同盟国であった朝鮮に対して、新たに海洋勢力として登場した日本が挑戦して東北アジア地域の覇権交代を目指したという点で、世界戦争(覇権戦争)の性格を持つとても重要な歴史的イベントである。壬辰倭乱以前まで、満州地域とモンゴルなど中国(東)北部で発生した勢力と中国勢力の葛藤が東北アジアの最も重要な意味を持つ国際的紛争であった。その成敗により中国王朝の交替という形態で覇権が交代した。しかし、壬辰倭乱以後は、韓半島をめぐる中国を始めとする内陸勢力と日本など海洋勢力の角逐がより重要な意味を持つようになった。特に大陸勢力と海洋勢力の間の勢力競争の戦略的要衝地に属する韓半島の地政学的特徴により、壬辰倭乱以後、韓半島をとりまく東北アジア地域の勢力版図形成と葛藤が本格的に展開された。壬辰倭乱はこのような国際政治的状況の歴史的契機という側面において世界史的意味は少なくない。

このような国際政治史的側面で最も重要な意味を持つ壬辰倭乱について、東北アジアの国際戦争として認識され始めたのはそれほど遠い昔のことではなかった。これはこの戦争以後、壬辰倭乱に対する韓国と日本の視角の違いによるものだった。壬辰倭乱という未曾有の戦争を経た朝鮮は、戦乱による物質的、心理的な傷を癒すことが最も重要であったがゆえに、この戦争を冷静に見ることが難しか

---

\* 国防大学校国防管理大学院副教授

った。日本の場合でも戦争を起こした豊臣政権が倒れて徳川政権が建ち、前の政権に対する批判的認識のために壬辰倭乱についての歴史的評価を下すことができなかった<sup>1</sup>。壬辰倭乱についての東アジア共通の歴史用語がないという事実は、これを「国際戦」や歴史的な「大事件」として認識・評価しないようにしていた今までの現実を反映する<sup>2</sup>。客観的検討と評価を経ないまま19世紀後半に日本の大陸侵略が本格化すると、日本の壬辰倭乱研究は政治的、軍事的目的を強く帯びて進められた。20世紀半ば以降、本格的に成し遂げられた韓国での壬辰倭乱研究も激変する政治社会の影響を強く受けながら進められた。と同時に日本の既存の研究を批判、意識しながら展開されるようになった。

本論文は解放以降、韓国歴史学界の壬辰倭乱理解の様相を時期別に分けて探り、その学説史的意味を検討することを目的とする。このため、各時期別に主要な論点を提示した研究を中心に時代的、学問的状況との有機的説明を試みてみようと思う。これまで壬辰倭乱については多様な研究史的整理がなされてきた<sup>3</sup>。合わせて、『歴史学報』で毎年整理される「回顧と展望(朝鮮前期)」でもその年の壬辰倭乱関連研究論著と動向が簡略に記されている。しかし、既存の研究史的検討の場合、壬辰倭乱関連論著の内容を分類して主要内容を紹介するのが大部分であって、その研究が提出された時期の学術的状況と関連した解釈は多少欠けた場合があった。したがって、本論文ではすべての関連論著を対象にするよりは、学説史的に論議を引き起こした論著を中心に当時の時代的状況との関連を通じたこの戦争についての解釈に集中するつもりである。

## I. 解放～1950年代の国難克服史観の台頭と壬辰倭乱

1945年、解放を迎えて韓国史学界が当面した課題は日帝植民主義史学が残した否定的側面を克服し、新国家、新文化建設にかなう新たな歴史意識と歴史体系を定立することであった<sup>4</sup>。日本植民統治期間、韓国人による壬辰倭乱の研究は相当な制約を受けざるを得なかった。日本人研究者は多数の壬辰倭乱関連の成果を発表し、1930年代には日本の参謀本部によって壬辰倭乱を戦争史的な立場から様々な側面を検討した『朝鮮の役』が発表され積極的に活用されたのに比べて、韓国人による成果は1931年の崔南善による『壬辰乱』がほとんど唯一の単行本であったという事実はこれを反証して

<sup>1</sup> 崔官『日本と壬辰倭乱』高麗大学校出版部、2003年、48-49ページ(최관『일본과 임진왜란』2003년, 고려대 학교 출판부, 48-49쪽)

<sup>2</sup> 韓明基「乱動」、「征伐」、「援助」を超えて—「壬辰倭乱」を呼ぶ東アジア共通の用語のために—『歴史批評』83、2008年、503ページ(한명기「'난동', '정벌', '원조' 를 넘어—'임진왜란' 을 부르는 동아시아 공통의 용어를 위하여』『역사비평』83, 2008년, 503쪽)。

<sup>3</sup> 最近なされた主要な研究史的成果としては次のものがある。李章熙「倭乱と胡乱」『韓国史研究入門』(2版)知識産業社、1987年(이장희「왜란과 호란」『한국사연구입문』(2판) 지식산업사, 1987년); 吳宗祿「壬辰倭乱～丙子胡乱時期軍事史研究の現況と課題」『軍史』38、1999年(오종록「壬辰倭亂～丙子胡乱時期 軍事史研究의 現況과 課題」『군사』38, 1999년); 趙浚来「壬辰倭乱研究の推移と課題」『朝鮮後期史研究の現況と課題』創作と批評社、2000年(조원래「壬辰倭亂연구의 추이와 과제」『조선후기사 연구의 현황과 과제』창작과비평사, 2000년); 朴哲暎「壬辰倭乱研究の現況と課題」『壬辰倭乱と韓日關係』景仁文化社、2005年(박철영「壬辰倭亂연구의 현황과 과제」『임진왜란과 한일관계』경인문화사, 2005년)。

<sup>4</sup> 盧泰敦「現代史学の流れ」『韓国史の手引き』(上)知識産業社、2008年、20ページ(노태돈「현대 사학의 흐름」『한국사길잡이』(상) 지식산업사, 2008년, 20쪽)。

いる。しかし、『壬辰乱』は壬辰倭乱についての伝統的な認識に立脚した簡略な概説書程度にすぎず、その歴史認識も問題点が少なくなかった。本文で「壬辰倭乱は近世東方における民族運動および新局勢打開の重要な関節」(48ページ)とあったり、「壬辰役は腐敗した朝鮮に対する浄化の運命であり、沈滞した朝鮮に対する奮起の時機であったにもかかわらず、朝鮮および朝鮮人はこの使命において失敗者であり」(50ページ)などと記されているように、とても退行的な歴史認識に基づいていた。これは1920年代初め、国内民族主義陣営の一部から日帝と妥協して「民族性改良」、「実力養成」などを主張した改良的民族主義路線と密接な関連を持っていた<sup>5</sup>。

これに比べて1937年、朝鮮総督府の支援下に朝鮮史編修会で編纂された30余巻の『朝鮮史』で整理された壬辰倭乱についての理解は歴史認識の側面では問題点が少なくないが、韓国と日本、中国の関連史料の総合整理を試みたという点で注目される点がある。壬辰倭乱を扱った第4編9巻と10巻の場合、日付別に『朝鮮王朝実録』以外にも『征蛮録』など当時知られていなかった地方の主要史料を発掘して活用してもいた<sup>6</sup>。『征蛮録』などの地方資料が韓国の壬辰倭乱研究に本格的に活用されたのは1980年代前後であった点を勘案すると、壬辰倭乱関連資料の広範囲な整理を通じた事実叙述の側面から、『朝鮮史』はその後の韓・中・日の関連研究者による共同研究の一つのモデルを提示しているという点で意義を見出すことができるだろう。ただ、各資料の厳密な史料批判とともにこの本の編纂に基づいていた関連歴史認識を厳密に批判、分析する必要は残っている。

解放直後では慌ただしい政治的状况により壬辰倭乱についての本格的な研究は現れなかった。ただ李舜臣についての何種類かの伝記物が出版された程度である。例を挙げると、解放直後である1946年に刊行された李允宰の『聖雄李舜臣』、李殷相の『李忠武侯一代記』と1952年に刊行された李無影の『李舜臣』がそれである<sup>7</sup>。そして、1950年李舜臣に関する論文集である『李忠武公』が震檀学会から編纂されたことは特記すべきである。ただ、この時期にいくつかの側面から壬辰倭乱についての認識の変化が現れている点は注目される。左右イデオロギー対立の激化と南北分断、そしてこれによる戦争の可能性が高まり、統一民族国家建設のための歴史認識が現れはじめたが、いわゆる新民族主義史学がそれである。

新民族主義史学は韓国史を民族史として理解して民族の団結を重視した。民族を重視していたといっても対外民族との関係を排他的に理解するのではなかった。むしろ民族自立に基づいた国際親善を最も理想的な国際関係として設定し、過去の我が民族の対外関係史を民族闘争と民族親善の反復として理解した<sup>8</sup>。すなわち、民族主義の立場から対外関係史の定立を試みたことで壬辰倭乱への理解もこれに依拠して明らかになった。

代表的な新民族主義史学者である孫晋泰は壬辰倭乱の代わりに「日本との7年戦争」という用語を

<sup>5</sup> 姜萬吉『改めて書いた韓国現代史』創作と批評社、1994年、31-32ページ(강만길『고쳐 쓴 한국현대사』창작과비평사, 1994년, 31-32쪽)。

<sup>6</sup> 『朝鮮史』第4編第9巻「凡例」(『朝鮮史』제4편 제9권「凡例」)。

<sup>7</sup> 盧永九「歴史の中の李舜臣認識」『歴史批評』69、2004年、352ページ(노영구「역사 속의 이순신 인식」『역사비평』69, 2004년, 352쪽)。

<sup>8</sup> 韓永愚『韓国民族主義歴史学』一潮閣、1994年、254ページ(韓永愚『한국민족주의역사학』일조각, 2008년, 254쪽)。

使用して、朝鮮と日本との間の戦争であったことを明示した。それ以前まで倭乱という用語を使用していたものとは明らかな差異を見せている。特に、壬辰倭乱に関する諸記述のなかで義兵について相当詳しく記述した。彼は「人民軍の蹶起」という項目で「大多数の人民は民族を防衛するために蹶起したので、郭再祐、鄭仁弘、金沔らの部下は慶尚道で(中略)特別な指導者もなく人民の自覚として蹶起したのは洪原、咸興、永興の地で起こった純粋な農民軍であった。彼らは階級を離れて民族を守護しようとしたのであるから、壮烈に戦って敵に敗れることもあったが、これは倭乱7年史で特に記憶すべき輝かしい事実であった。」と叙述されている<sup>9</sup>。たとえ民族主義史観に立脚した通史的叙述であっても、この戦争が持つ性格とともに義兵研究の重要性を認識させる点は、その後の壬辰倭乱史研究に重要な認識の方向を提示している。

1950年、韓国戦争によって孫晋泰、李仁栄ら多数の民族主義歴史家たちが北に拉致され、その後の抑圧的で、政治的な状況によって、唯物論とともに民族主義思想までも不穏なものとしてみなされるほど暗澹とした状況が続いた。したがって、実証史学以外の史観は発展しにくかった<sup>10</sup>。ただ、韓国史を韓国民族の歴史として理解する民族主義的性格は維持されたが、共同体的精神、民族精神の強調など韓国戦争による傷痕が見られる<sup>11</sup>。特に、1950年代の壬辰倭乱関連研究で検討しなければならないものとして、いわゆる「国難克服史観」の台頭をあげざるを得ない。たとえ専門的な歴史学研究成果として見るにはためらわれるとしても、1950年代半ばの頃には韓国史の一部として認識されもした。

この史観によれば、国難史は「国史の一部として当時我が民族が内外的に経た国難の記録」として定義し、韓国民族が数多くの国難を経ても一度も外国の勢力に屈服しなかったことを特記しようとした<sup>12</sup>。この史観は韓国戦争による北韓に対する強い敵愾心の一つの反映として、戦争直後に極右反共体制を強固にしようとした北進統一運動の過程で現れたものであった<sup>13</sup>。壬辰倭乱についても国難史の一環として相当な分量が叙述された。たとえ強い政治的目的を帯びていたとしても、国難克服史観が国難史を東洋戦乱史の一部であると同時に世界戦乱史の一環として認識した点で、その後戦争史的視角の壬辰倭乱研究の活性化を期することができていた点は特記することができるだろう<sup>14</sup>。国難克服史的戦争史認識は、その後も主な韓国史研究の外郭で適切な距離を置きながら、少なくない影響を及ぼしてもいた。

1950年代には通史的叙述を除いて、壬辰倭乱についての専門的な研究はそれほど多く現れなかった。ただ1952年韓祐勳が壬辰倭乱の原因を日本国内情勢と結びつけて把握した研究を発表し、その後崔永禧が朝鮮朝廷の失政と戦争勃発で被害を受けた沿海住民の動態を考察した論文を提出した

<sup>9</sup> 孫晋泰『国史大要』乙酉文化社、1949年、213ページ(孫晋泰『國史大要』을유문화사、1949年、213쪽)。

<sup>10</sup> 韓永愚『歴史学の歴史』知識産業社、2002年(한영우『역사학의 역사』지식산업사、2002년)。

<sup>11</sup> 李丙燾『国史と指導理念』1955年、総説、45ページ(이병도『국사와 지도이념』1955년、총설、45쪽)。

<sup>12</sup> 金鐘権『国難史概観』明文堂、1956年、「序文」、1ページ(김종권『國難史概観』明文堂、1956년、「序文」、1쪽)。

<sup>13</sup> 徐仲錫『曹奉岩と1950年代』(上)歴史批評社、1999年、256-260ページ(徐仲錫『조봉암과 1950년대』(상)、역사비평사、1999년、256-260쪽)。

<sup>14</sup> 朝鮮戦争中であった1950年10月国防部に戦史編纂会が発足して(委員長:李丙燾)韓祐勳、全海宗ら多数の少壮歴史学者が参与したのはその後の韓国の戦争史研究のための小さなきっかけとなった。

のが注目される<sup>15</sup>。韓祐勅の研究は豊臣政権の構造的な問題と壬辰倭乱勃発原因を連結させた先駆的な業績であった。1990年代まで壬辰倭乱勃発の原因についての本格的な国内の研究はなかったという点を勘案すれば、その研究史的な意味は小さくない。あわせて崔永禧の研究は1960年代に入って本格的に現れた義兵研究の端緒を開いた。

## Ⅱ. 1960～1970年代の民主主義の流れと壬辰倭乱

1960年の4. 19革命は大学生など知識人が主導して多数の市民が参与した近代市民革命であった。この時期に標榜された「近代」というのは民主主義、民族主義、産業化を包括する概念であった<sup>16</sup>。特に1950年代に不穏なものとして認識されていた民族主義について韓国人が再認識するようになり、5. 16クーデターで執権した朴正熙政権もこのような流れに逆らうのが難しく、むしろ積極的に民族主義を前面に推し立てるようになった<sup>17</sup>。当時軍部は安保と経済発展に国民を動員するために民族主義イデオロギーを適切に活用するにあたり、いわゆる官主導民族主義論を構築した<sup>18</sup>。この官主導民族主義は国家主義に基づいたものとして既存の民族主義の流れのうち一部を継承したが、自由主義に立脚した民族主義とは衝突するようになった<sup>19</sup>。1960年代以降、韓国民族主義から登場する民族の特殊性と優秀性を強調する流れと、世界史的普遍性の中で民族国家の現実的利害関係を強調する流れなど二律背反的属性はこのような状況に起因している<sup>20</sup>。このような二つの流れは時代的状況の展開に従って強調点を異にしながら登場するようになった。

韓国民族主義の二つの傾向は韓国史学界にも少なくない影響を及ぼすようになった。植民体制と植民史観についての全面的な批判とともに、この代案として韓国史の構造的な発展と民族の優秀性を強調する流れも現れた。1960年代以降、壬辰倭乱に対する理解でもこのような様相は如実に現れている。1960年代の壬辰倭乱研究で注目される現象は、既存の李舜臣関連研究<sup>21</sup>とともに義兵研究が活

<sup>15</sup> 韓祐勅「壬辰乱の原因に関する検討」『歴史学報』1、1952年(한우근「壬辰亂 原因에 관한 검토」『역사학보』1、1952년)；崔永禧「壬辰丁酉乱時沿海民の動態」『史叢』2、1957年(최영희「壬辰丁酉亂時 沿海民의 동태」『史叢』2、1957년)

<sup>16</sup> 鄭容郁「5. 16クーデター以後知識人の分化と再編」『1960年代韓国の近代化と知識人』ソニン、2004年、167ページ(정용욱「5. 16 쿠데타 이후 지식인의 분화와 재편」『1960년대 한국의 근대화와 지식인』선인、2004년、167쪽)。

<sup>17</sup> 1960年を前後した時期は第2次世界大戦以降、覇権主義的兩極國際主義を脱皮して第3世界の新たな代案として民族主義が高揚した。この時期の民族主義を近代初期の民族主義と区分してNeo-Nationalismと呼んだ(趙東杰『現代韓国史学史』ナナム、1998年、399-400ページ(조동걸『現代韓國史學史』나남、1998년、399-400쪽)。

<sup>18</sup> 朴正熙時代の官主導民族主義の動きについてはチェ・ヨンシク「朴正熙の「民族」創造と動員された国民統合」(『韓国政治外交史論叢』第28集2号、2007年)(최연식「박정희의 「민족」 창조와 동원된 국민통합」(『한국정치외교사논총』제28집2호、2007년))に詳しい。

<sup>19</sup> 朴賛勝『民族主義の時代』景仁文化社、2007年、311ページ(박찬승『民族主義의 시대』경인문화사、2007년、311쪽)。

<sup>20</sup> 洪錫律「1960年代韓国民族主義の分化」『1960年代韓国の近代化と知識人』ソニン、2004年、221ページ(홍석률「1960년대 한국민족주의의 분화」『1960년대 한국의 근대화와 지식인』선인、2004년、221쪽)。

<sup>21</sup> 崔碩男『民族の聖雄李舜臣』博友社、1965年(최석남『민족의 聖雄 李舜臣』박우사、1965년)。

性化したことを挙げることができる。義兵についての研究は1960年の崔永禧の研究によってその端緒が開かれた<sup>22</sup>。崔は戦乱が度々起こる韓国史において他の民族の占領下で広範囲に民衆の抗争に参加した事例として義兵に注目し、義兵が立ち上がることができた社会的背景と義兵将の性格、義兵の発展を全般的に検討した。彼は義兵を「民族的レジスタンス」として規定し、郷土防衛意識と日本民族に対する韓国民族の感情を壬辰倭乱時期における義兵の思想的基盤であると認識していた。たとえ1950年代の国難克服史観的な意識が一部見られるとはいえ、義兵を民族主義的次元で認識している点は当時の時代状況の一つの反映であるということが出来る。特に、崔は論文の末尾に今後の義兵研究活性化のために地方史料の収集の必要性を付記するなど今後の研究課題を提示した。

崔永禧の研究を契機として義兵についての多様な検討と各地域の主要な義兵についての研究が活発になされ始めた。義兵と官軍との関係に注目した李在浩の研究<sup>23</sup>と慶尚右道の郭再祐義兵部隊の組織と戦術を分析し、この地域の義兵活動が壬辰倭乱の戦況に及ぼした影響を分析した金潤坤の論文が提出された<sup>24</sup>。これ以外にも黄海道、忠清道、全羅道地域の義兵を分析した李章熙、崔權黙、宋正炫らの論文が1970年を前後した時期に集中的に提出され、各地域の義兵活動の様相について理解の幅が広がった<sup>25</sup>。この時期に集中的になされた義兵研究は、壬辰倭乱が日本の一方的な勝利であったという従来の誤った認識を払拭しただけでなく、むしろ降倭などに見られるように精神史的な側面から我々のほうがより強靱であることを示してくれもした<sup>26</sup>。特に、この時期の義兵研究では、今まであまり活用されていなかった壬辰倭乱時に義兵将として活動した人物の文集および節義録などの資料が広く活用されたのは、以前の研究より進展した。戦闘史的視角から壬辰倭乱の主要戦闘を整理した李炯錫の『壬辰戦乱史』では、義兵部隊が行った主要戦闘を紹介分析している。特に李は義兵の活躍を国運を立て直す民族精神の発揮として評価して、壬辰倭乱の10の特徴のひとつとして規定もした<sup>27</sup>。

以上で見たように、1960年代初めから次第に活発になった壬辰倭乱研究の成果は中等教科書など様々な通史に反映されはじめた。例をあげると、1966年李基白の『韓国史新論』では、第10章「両班社会の発展」に第3節「倭との抗争」を設けて壬辰倭乱を扱っている<sup>28</sup>。しかし、まだ韓国史体系全般で壬辰倭乱の重要性と比重はそれほど浮き彫りになっていなかったものと考えられる。これは教科書などに壬辰倭乱が独立した章や節として構成されず「朝鮮時代の対外関係」とともに扱われている点から確

<sup>22</sup> 崔永禧「壬乱義兵の性格」『史学研究』8、1960年(최영희「임란의병의 성격」『사학연구』8、1960년)。

<sup>23</sup> 李在浩「壬乱義兵の一考察—特に官軍と明軍との関係を中心に—」『역사학보』35・36合輯、1967年(이재호「임란 의병의 일고찰—특히 관군과 명군과의 관계를 중심으로—」『역사학보』35・36합집、1967년)。

<sup>24</sup> 金潤坤「郭再祐の義兵活動—特に組織と戦術・戦略を中心に—」『역사학보』33、1967年(김윤곤「곽재우의 의병 활동—특히 조직과 戰術・戰略을 중심으로—」『역사학보』33、1967년)。

<sup>25</sup> 李章熙「壬乱海西義兵についての一考察—延安大捷を中心に—」『史叢』14、1969年(이장희「임란 해서의병에 대한 일고찰—연안대첩을 중심으로—」『史叢』14、1969년); 崔權黙「壬乱の時の湖西義兵について」『論文集』(忠南大)9、1970年(최권묵「임란때의 湖西의병에 대하여」『論文集』(충남대)9、1970년); 宋正炫「壬辰倭乱と湖南義兵」『歴史学研究』4、1972年(송정현「임진왜란과 호남의병」『역사학연구』4、1972년)。

<sup>26</sup> 李章熙「倭乱と胡乱」『韓国史研究入門』(2版)知識産業社、1987年、320ページ(이장희「왜란과 호란」『한국사연구입문』(2판) 지식산업사、1987년、320쪽)。

<sup>27</sup> 李炯錫「壬辰戦乱史」(上巻)、1967年、7ページ(이형석「壬辰戰亂史」(上巻)、1967년、7쪽)。

<sup>28</sup> 李基白「韓国史新論」—潮閣、1966年240-246ページ(이기백「한국사신론」일조각、1966년、240-246쪽)。

認することができる<sup>29</sup>。ただしいくつかの点で進展した側面が現れている。ある高等学校国史教科書の壬辰倭乱に関する叙述はこれをよく示している。

戦争の初期には官軍の無力によって倭軍が優勢であったが、次第に危うくなった祖国の運命を救おうとする民族の義憤がわき起こり始めあちこちで義兵が蜂の群れのように起こった。一方、海上では名将李舜臣の目覚ましい活躍で連戦連勝を収めて制海権を完全に掌握し、戦況を逆転させ始めた。(中略)陸地で起こった義兵は農民が主力になったが、彼らを糾合して指揮したのは金千鎰、趙憲、郭再祐、鄭文学ら文人と休静、惟政のような僧侶であった。これら義兵の遊撃戦術は敵をよく煩わせ戦意を大きく失わせた。一方、朝鮮の要請で明軍が来援し、我が軍と力を合わせて平壤を回復したのち、続いて敵を追撃した(後略)(強調は筆者)<sup>30</sup>。

この文では「無力」な朝鮮の官軍に代わる義兵の存在をはっきりと浮き彫りにさせており、義兵の主力が基本的に農民であったことを直視している。そして、義兵の主だった戦術である遊撃戦術によって、日本軍にかなりの打撃を与えたものと把握している。すなわち、壬辰倭乱のうち陸上の戦闘は義兵主導によってなされていたことを示しており、李舜臣、明軍とともに義兵が壬辰倭乱克服の主役であったことを示している。これは以降、壬辰倭乱理解の主な方向を形成するようになったという点で意味を持つ。義兵中心的な壬辰倭乱認識は壬辰倭乱に対する初期研究において非常に肯定的な側面を持っていたが、義兵の活動や官軍など別の部門との関係を正確に理解するのが難しくなっただけでなく、その後壬辰倭乱に対する全般的な歴史像を構築するのに障害として作用するようにもなった。

1960年代の壬辰倭乱研究で特記すべき事実は先に言及した『壬辰戦乱史』(上・下)の刊行を挙げることができる。この本は壬辰倭乱を戦闘史中心に著述した1900ページにわたる膨大な著述で、壬辰倭乱を全部で6つの時期に分けて主要戦闘を紹介、分析している。特に『朝鮮王朝実録』など基本的な正史類資料は言うまでもなく、各種文集、野史、邑誌など多様な国内資料を大部分網羅しているだけでなく、日本側の資料も多様に紹介するなど壬辰倭乱関連研究の主な成果といえる。戦闘史を中心に壬辰倭乱についての総合的な整理を試みたこの本は、韓国の壬辰倭乱研究において現在まで積極的に評価されていないのは事実である。これは、1990年代半ばまで韓国の壬辰倭乱研究が義兵と水軍の活動を中心になされており、戦争史または戦闘史的な視点からの成果がなかったことに起因している。今後、壬辰倭乱についての学説史的、研究史的な全面的検討が必要な古典的著述であると評価することができよう<sup>31</sup>。

<sup>29</sup> このような点は1970年代国史編纂委員会が出した25巻『韓国史』で、壬辰倭乱が第12巻(両班社会の矛盾と対外抗争)で「日本の侵寇」(崔永禧執筆)1節だけを占めていたのは、当時認識されていた韓国史体制全体における壬辰倭乱の比重の低さを示してくれる。

<sup>30</sup> 韓治勲『国史』乙酉文化社、1968年、156-157ページ(한우근『국사』을유문화사、1968년、156-157쪽)。

<sup>31</sup> 『壬辰戦乱史』の著者である李焜錫は日本陸軍士官学校(第45期)を卒業して朝鮮戦争中、師団長を歴任した予備役陸軍少将出身である。1952年に陸軍本部軍史監を歴任し、国防部政訓局長を経て転役後1965年国防史学会会長、1970年に第2代戦史編纂委員長に任命され戦史にとっても該博であった(国防部軍史編纂研究所『軍史編纂研究所 55年史』、2006年、43-44ページ(국방부군사편찬연구소『군사편찬연구소 55년사』、2006년、43-44쪽))。

1970年代に入り、壬辰倭乱研究は多少の変化が現れ始めた。まず既存の義兵研究の流れはそのまま維持されたが<sup>32</sup>、新たな変化の動きが現れ始めた。許善道は義兵活動を単純に郷村地域の士族と農民が糾合した民族抗争として理解していたこれまでの理解から脱して、義兵活動が次第に国家から一定の調整と統制を受けるようになったことを確認している<sup>33</sup>。これは、義兵研究が単純な民族抗争次元での検討から一段階進展されたことであり、義兵活動と国家の存在を完全に分離して理解していたことから脱皮できる端緒を開いたという点で学説史的な意味が小さくない。このような視角の確保は、壬辰倭乱についての従来の研究が民族史的な側面で義兵を高く評価するために士禍・党争など政治的素乱を相対的に高く浮き彫りにし、農民兵で構成された義兵の性格を究明するために当時の民間の動向に注目した既存の研究傾向に対する批判に起因したものだ。許善道の問題意識は、壬辰倭乱前後の朝鮮の軍事制度についての一連の研究を通じて確認されたのだった<sup>34</sup>。

義兵研究とともに、1970年代の壬辰倭乱関連の研究で注目される別の側面としては、明軍の派兵と関連した側面の検討がなされ始めたことを挙げることができる。劉九成は明軍の派兵過程と明軍による民間人被害などの問題を整理した成果を提出した<sup>35</sup>。特に、明・清時代の研究者である崔韶子は、明軍が派兵されたのは朝鮮の要請とともに戦争が明の本土に拡大して北京一帯が危険にさらされる事態を防ぐためであるという、意味ある主張を提示した<sup>36</sup>。これは壬辰倭乱の性格を単純に日本の朝鮮侵略とその応戦であるとする民族史的視角から脱して、明を含む東北アジアの国際戦争であるという視角を可能にする契機となった。この他に、壬辰倭乱期の明と日本の講和協議についての研究<sup>37</sup>も1970年代半ばに変化した壬辰倭乱研究に対する視角の一端を示している。1970年代半ばに本格的に現れ始めた新たな研究傾向は、たとえ拙い水準の場合が大部分であったとしても、初期の戦況と義兵、李舜臣に集中していた壬辰倭乱研究が、その後一段階進展できる契機を整えたという点で意味が小さくない。

壬辰倭乱研究の幅と深みが少しずつ拡大し、壬辰倭乱の多様な側面についての研究が現れるのと対照的に、1970年代の抑圧的政治状況は、壬辰倭乱の理解と研究を歪曲させるきっかけとなった。国家主義と軍事主義が結合したファシズム体制であるいわゆる維新政権は、これを払拭するために民族的民主主義を主唱して「国籍ある教育」「主体的民族史観」の成立を強調した。このため国史教育の強化とともに護国文化遺跡の復元や整備、国家主義に立脚した忠孝思想の強調や教育などが国家的次

<sup>32</sup> 李章熙「鄭文孚と関北義兵」『史叢』21・22、1977年(이장희「정문부와 관북의병」『史叢』21・22、1977년); 崔槿黙「壬辰時湖西義兵について」『論文集』(忠南大)9、1970年(최근묵「임란 때의 호서의병에 대하여」『論文集』(충남대)9、1970년)

<sup>33</sup> 許善道「鶴峰先生と壬辰義兵活動」1976年(허선도「鶴峰先生과 임진의병 활동」1976년)。

<sup>34</sup> 許善道「制勝方略研究」(上・下)『震檀學報』36・37、1973年(허선도「制勝方略 연구」(상·하)『진단학보』36・37、1973년); 許善道「鎭管體制復旧論研究」『国民大學論文集』5、1973年(허선도「鎭管體制 복구론 연구」『국민대학논문집』5、1973년)。

<sup>35</sup> 劉九成「壬辰時明兵の來援考—朝鮮の被害を中心に—」『史叢』20、1976年(유구성「壬辰時 明兵의 來援考—朝鮮의 被害를 中心으로—」『史叢』20、1976년)。

<sup>36</sup> 崔韶子「壬辰亂時の明の派兵についての論考」『東洋史學研究』11、1977年(최소자「임진란시 명의 파병에 대한 논고」『동양사학연구』11、1977년)。

<sup>37</sup> 權重憲「壬辰倭亂を中心とした三國(韓・中・日)の外交關係」慶熙大學校碩士學位論文、1975年(權重憲「임진왜란을 중심으로 한 三國(한/중/일)의 외교관계」경희대학교 석사학위논문、1975년)。



元でなされた<sup>38</sup>。これは北韓による攻勢的な対南政策や東西デタントなど急変する国内外情勢と相まって国難克服中心の歴史教育の強化が始まることも軌を一にするものであった<sup>39</sup>。特に、1975年の南ベトナム敗亡を契機として、一時、国難克服史観が再登場して風靡することもあった。次の文章からは、当時の代表的な国難克服史観の歴史書に現れた戦争史認識の一面をうかがうことができる。

我々から戦争をしかけたことはほとんどなく、いつも奇襲攻撃を受けて、開戦当初は被害を受けてきた。しかし、わが民族の応戦体制はいつでも一面抵抗(戦争)一面創造(建設)の偉大な精神全力をよく発揮してこれを克服することができた<sup>40</sup>。

わが民族の特質は不撓不屈の抵抗の粘りにある。(中略)識者たちは無論、地方農民と婦女子にいたるまで、日帝のあらゆる虐待と圧政にも屈せず抵抗し、個々人の栄華や安逸を惜しげもなく投げ打ち、自由と独立のために血を流した<sup>41</sup>。

上記の引用文を通じて分かるように、国難克服史における戦争史認識は基本的に初期の敗戦と全民族の団結による抗戦であるという方式で叙述されている。これは壬辰倭乱に対する国難克服史観的認識をよく示している。このような認識は一部の学者による壬辰倭乱関連記述にも現れていた。

国難克服史観のように観念的で特定の事実を強調して当時の政治的要求に呼応した歴史認識は、壬辰倭乱に対するより客観的な研究の必要性が高まった。1980年以降の新たな視点から壬辰倭乱への理解が試みられたのは、このような史観についての韓国史学界の冷静な対応であったといえる。しかし、このような国難克服史観の認識は1979年に維新政権が倒れた以後にも完全に払拭できず、以後、壬辰倭乱研究と国史、国民倫理などいわゆる国定科目を通じて引き続き残存し、一般的な認識として定着するようになった。後述するが、2000年代に入って脱民族主義的歴史学の立場から、民族主義史観に立脚した韓国史研究全体が批判の対象になるひとつの契機をつくったことは否定しがたい。

### Ⅲ. 1980～1990年代の新たな壬辰倭乱認識の台頭

維新体制の崩壊、新たな民主的政治の展望と模索で始まった1980年代は、新軍部による軍事独裁体制が成立したので、しばらくの間政治的民主化は留保された。しかし、市民意識の高揚により、政治的、社会的民主化運動が活発に展開し、1987年6月抗争を通じて「節次的民主主義 (procedural democracy)」が確立した。このような政治社会的変化は韓国史研究においても様々な側面で現れた。

<sup>38</sup> 전재호『反動的近代主義者朴正熙』冊世上、2000年、93-107ページ(전재호『반동적 근대주의자 박정희』책세상, 2000년, 93-107쪽)。

<sup>39</sup> 1971年、文教部で編纂した国史補充教材である『試練と克服』(시련과 극복)が代表的である。

<sup>40</sup> 李瑄根『韓民族の国難克服史』徽文出版社、1978年、viiページ(이선근『한민족의 국난극복사』휘문출판사, 1978년, vii쪽)。

<sup>41</sup> 李瑄根、前掲書、36-37ページ。

まず、最も大きい変化としては民衆を变革の主体として認識し、歴史研究の主な対象とする民衆史学論が提起されたことを挙げることができる。これとともに市民社会の形成にともない、歴史に対する大衆の関心が増加し、歴史学の大衆化問題が論議された<sup>42</sup>。時代状況の変化は歴史解釈でも新たな模索をもたらし、これは壬辰倭乱研究でも多様な形態で現れた。

1980年代の新たな壬辰倭乱研究の端緒は李泰鎮と許善道によって始められた。1980年、李泰鎮は「壬辰倭乱に関する理解のいくつかの問題」(『軍史』創刊号)という非常に挑発的な題目の小論を発表した。この論文で李は、朝鮮の敗北に終わったかのように認識されている壬辰倭乱理解に根本的な問題提起をし、朝鮮官軍の初期敗北の原因を16世紀の威臣政治の弊政による朝鮮初期軍事制度の崩壊に求めた。また、それまで壬辰倭乱研究で注目されなかった朝鮮と日本の戦術と武器体系についての理解を促した。特にこの論文は壬辰倭乱を理解する上で戦術と武器体系の重要性を提起したという点で、それ以降の研究に与えた影響は少なくない。壬辰倭乱に対する進展した認識は翌年発表した研究でさらに具体的に補強された<sup>43</sup>。李は壬辰倭乱について海戦の李舜臣、義兵の活躍など個人の業績を重視したり、十万養兵説など個別的事実を強調しすぎた既存の理解体系が持つ未熟性を批判した。このような視角から壬辰倭乱克服の重要な要素であった義兵活動を留郷所、書院など士林勢力の郷村秩序を確立するための努力に起因したものとして把握した。

1985年、許善道は既存の壬辰倭乱認識に対しての全般的な批判と反省を促し、新たに戦争史的視角から概観的な研究を通じて壬辰倭乱を理解しなければならないという非常に意味ある研究を発表した<sup>44</sup>。許はこの論文で壬辰倭乱についての分析と理解は、やはり漠然とした事前報告の不備、戦争準備がおろそかだったこと(10万養兵反対)などを云々するのではなく、今日の西洋戦史のそのように軍制、軍需、武器、戦術、関防、情報などをもとに軍事的、戦争史の見地から具体的に分析しなければならないと主張した。戦争史的分析を通じた壬辰倭乱認識は1970年代半ばの論文で自身が提示した問題認識を深化させたものだった<sup>45</sup>。あわせて許は既存の研究に現れるいわゆる殉国史観や英雄史観の克服を促した。これは1970年代に風靡していた国難克服史的壬辰倭乱認識に対する批判的視角であるだけでなく、1980年代初期に新軍部によって試みられた浪漫的膨張主義歴史認識と言える、いわゆる雄飛史観に対しての強力な批判という点でその学説史的な意味は小さくない<sup>46</sup>。1990年代以降、戦争史的な視角で壬辰倭乱を理解しようとしていた一群の研究者の登場は、許善道のこの研究から大きな影響を受けたことは否定しがたい。

許善道は壬辰倭乱についての新たな認識に基づいて数編の関連研究を発表したが<sup>47</sup>、壬辰倭乱

<sup>42</sup> 盧泰淳、前掲論文、2008年、30-31ページ。

<sup>43</sup> 李泰鎮「壬辰倭乱克服の社会的動力—士林の義兵活動の基底を中心に」『韓國史學』5、1981年(이태진「임진왜란 극복의 사회적 동력—士林의 의병활동의 基底를 중심으로」『韓國史學』5、1981년)。

<sup>44</sup> 許善道「壬辰倭乱論—正しく新たな認識」『千寛宇先生還暦紀念韓國史學論叢』1985年(허선도「壬辰倭亂論—올바르고 새로운 인식」『千寛宇先生 還暦紀念 韓國史學論叢』1985년)。

<sup>45</sup> 許善道「鎮管体制復舊論」研究—柳成龍の軍制改革の基本施策—『國民大學論文集』5、1973年、43-44ページ(허선도「鎮管體制復舊論」研究—柳成龍의 軍制改革의 基本施策—」『國民大學 論文集』5、1973년、43-44쪽)。

<sup>46</sup> 陸軍本部「統一と雄飛に向かう同胞の歴史」序文、1983年(육군본부「통일과 웅비를 향한 겨레의 역사」서문、1983년)。

<sup>47</sup> 許善道「壬辰倭乱の克服と嶺右義兵—その戦略的意義を中心に—」『晋州文化』4、1983年(허선도「임진왜

への理解を全面的に変化させる具体的成果を提示できなかった。同様に、1980年代まではまだこのような認識が他の研究者を通じて具体的な研究として反映されもしなかった。義兵研究の場合、一部の論者の場合まだ壬辰倭乱時期の義兵運動を兵力、火力などの諸問題が複合した戦争史的視角から認識・評価することがなく、戦乱克服史的観点から認識・評価されなければならないという多少退嬰的な主張が現れるなど、1970年代の国難克服史的歴史認識が完全に克服できなかった限界も示した。しかし、微妙ではあるが若干の変化が現れるようになった。まず、1980年代はじめ、著名な義兵将とその活動についての総合的な整理が試みられた<sup>48</sup>。これは既存の研究の拡大という性格もおびているが、以前よりその活動をミクロ的に分析することができる土台を準備した。1980年代半ば以降、壬辰倭乱の時期別、地域別の主要戦闘についての細部にわたる検討が始まったのはこの反映であるといえよう<sup>49</sup>。これは1980年代後半における地方自治制の復活の動きとも一定の関連を持つものであった。

1987年6月の民主抗争で民主的政府樹立が明らかとなり、1960年代以降、強力な中央集権体制によってしばらく忘れられていた地方自治の展望が現実的に近づいてきた。これによって韓国史研究でも地方自治制に対する関心が高まり始めた<sup>50</sup>。地方自治についての関心は該当地域史についての関心として現れた。1980年代後半から地方自治体レベルで集中的に現れる地域史関連発表会はこれを反映している。壬辰倭乱研究でもこのような様相が現れているが、最も代表的なのは地域義兵の活動についての一連の研究がそれである<sup>51</sup>。これによって著名な義兵将の活動を中心としていた研究とは別に、郷村社会史の史料を活用した小規模義兵部隊および義兵将についてのミクロ的分析を試みるようになった。これを通じて義兵の性格も義兵と郷兵の二種類の形態があったことを確認することができた。特に、ミクロ的義兵研究の過程で、1990年代以降、義兵に対する既存の認識を変化させうる史料の根拠を確保するなど、少なくない役割を果たすことになった。

一方、1980年代に入って既存の義兵研究と異なる接近を試みた研究が現れ始めた。これは1970年代以降に活発になされた郷村社会史研究と軌を一にするもので、壬辰倭乱期の在地士族の郷村支配

란의 극복과 嶺右義兵—그 전략적 의의를 중심으로—『진주문화』4, 1983년); 許善道「神器秘訣」研究: 韓國火藥兵器の装方法を中心に(上・下)『韓國學論叢』5, 6, 1984年(허선도「神器秘訣」研究: 韓國火藥兵器의 装方法을 中心으로)(상·하)『韓國學論叢』5, 6, 1984년); 許善道「壬亂劈頭東萊(釜山)での様々な殉節とその崇仰事業について」『韓國學論叢』10, 1988年(허선도「壬亂劈頭 동래(부산)에서의 여러 순절과 그 숭양사업에 대하여」『한국학논총』10, 1988년)。

<sup>48</sup> 李章熙『郭在祐研究』養英閣, 1983年(이장희『郭在祐研究』양영각, 1983년)、趙浚來『壬亂義兵將 金千鎰研究』學文社, 1982年(조원래『壬亂義兵將 金千鎰研究』학문사, 1982년)

<sup>49</sup> 河泰奎「壬亂における熊峙戦の位相について」『全羅文化論叢』4, 1990年(하태규「임란에 있어서 熊峙戰의 위상에 대하여」『진라문화논총』, 1990년); 崔孝弼「壬辰倭乱中の慶州戦闘」『慶州史學』10, 1991年(최효식「임진왜란 중의 경주 전투」『경주사학』10, 1991년); 朴性植「晋州城戦闘」『慶南文化研究』14, 1992年(박성식「진주성 전투」『경남문화연구』14, 1992년)など、多数。

<sup>50</sup> 李泰鎮「地方自治体の民族史的伝統」『新東亞』346, 1988年(이태진「지방자치제의 민족사적 전통」『新東亞』346, 1988년)。

<sup>51</sup> 趙浚來「壬亂海戰と興陽水軍」『南道文化研究』2, 1986年(조원래「임란 해전과 흥양수군」『남도문화연구』2, 1986년); 羅鐘宇「壬亂義兵と長城南門倡義」『郷土文化研究』4, 1987年(나종우「임란의병과 장성남문 창 의」『향토문화연구』4, 1987년); 趙浚來「羅州地方の事例にみる壬亂義兵の研究課題」『羅州牧の再照明』木浦大博物館, 1989年(조원래「나주지방 사례로 본 임란의병 연구과제」『나주목의 재조명』목포대 박물관, 1989년); 金錫禧「壬辰倭乱と清道地域の倡義活動」『釜山史學』23, 1992年(김석희「임진왜란과 청도지역의 창 의 활동」『부산사학』23, 1992년)など多数。

体制が義兵の募兵と活動の重要な基盤であったことを分析した論文がそれである<sup>52</sup>。これは1980年代はじめ、李泰鎮らの問題意識を直接に継承したものであった。

先に見たように、1980年代に入り壬辰倭乱に対する新しい壬辰倭乱理解が少なからず試みられ始めたが、既存の理解体系を完全に克服することはできなかった。これは既存の理解体系がとても強く残っていた側面もあるが、1980年代初めの軍部の抑圧的政治社会的状況と、これに対する反作用として学者らが抵抗的民衆中心の歴史理解体系化に集中したのも重要な原因になった。いわゆる民衆史学、民衆的民族主義史学の台頭がそれである<sup>53</sup>。こうした歴史認識下では対外戦争である壬辰倭乱より民衆の反封建抗争や反侵略抗争がさらに意味を持つようになった<sup>54</sup>。実際、1980年代の民衆史学論の影響が壬辰倭乱研究で一部現れ始めた。特に、1990年代の義兵研究や韓国史概説書の義兵叙述でもこのような様相が現れている。次の叙述はこれをよく示している。

執権層の大部分は自分たちが生きのびる方法を求めて(中略)民の大きな力が結集されて出現した義兵抗争によって長期間の戦乱を克服し、侵略軍を追い払うことができた。平素、国は民を大したことのない存在として見做し、差別・収奪して疎外してきたにも関わらず、民は自身の犠牲を払いながらも最後まで自分たちの国を守っていたのが壬辰倭乱史の真実だ<sup>55</sup>。

このような視角は1980年代の民衆史学論において民族構成員のうち一部を除いて大多数を民衆として見て、民族矛盾を一次的な解決課題と考えていた視角の片鱗が歴史研究に反映されたものであった。このような状況で許善道らによって提起された戦争史的視角の壬辰倭乱理解は多少望み難かった。

1990年代に入って、壬辰倭乱研究は新たな契機を迎えた。戦争勃発400年である1992年を期して壬辰倭乱に対して一般的な関心が大きく高まり<sup>56</sup>、様々な分野で多数の関連研究が発表された。海軍軍史研究室で壬辰倭乱期の水軍活動の多様な側面を分析した『壬乱水軍活動研究論叢』(1993)はその代表的な成果といえよう。ともに国史編纂委員会で刊行した『韓国史論』22(1992)号は「壬辰倭乱の再照明」という特集号として編纂され、既存の義兵のほか、官軍の活動、明軍の参戦、被虜人、壬辰倭乱前の朝鮮の国防実態、豊臣秀吉の対外政策など多様な側面が検討された。

1990年代の壬辰倭乱研究はいくつかの側面において以前と異なる様相を示している。まず以前の

<sup>52</sup> 鄭震英「壬乱前後尙州地方士族の動向」『民族文化論叢』8、1987年(정진영「임란전후 尙州지방 사족의 동향」『민족문화논총』8、1987년); 高錫珪「鄭仁弘の義兵活動と山林基盤」『韓国学報』51、1988年(고석규「정인홍의 의병활동과 산림기반」『한국학보』51、1988년)。

<sup>53</sup> 盧泰敦「解放後民族主義史学論の展開」『現代韓国史学と史観』一潮閣、1991年、31-37ページ(노태돈「해방후 民族主義史學論의 전개」『現代 韓國史學과 史觀』일조각、1991년、31-37쪽)。

<sup>54</sup> 実際1980年代末に出版されたある概説書には目次に壬辰倭乱に関連した部分はなく、壬辰倭乱によって農村社会の変化が出始めたという簡略な言及があるだけだ(韓国歴史研究会『韓国史講義』ハヌル、1989年、170ページ(한국역사연구회『한국사강의』한울、1989년、170쪽))。

<sup>55</sup> 趙浚來「壬辰倭乱中の湖南地方の社会像」『韓国史学史研究』ナナム、1997年、260ページ(조원래「임진왜란 중 호남지방의 사회상」『韓國史學史研究』, 나남, 1997년, 260쪽)。

<sup>56</sup> 一般人の歴史への関心は、1980年代後半、韓国社会の民主化が進展し社会の多様性に対する関心が高まるとともに、急激な経済発展による所得の増加で一般人の文化生活についての欲求が増加した現象と対になっている。

研究より豊富な資料の発掘と活用がなされた。これは1980年代まで活発に研究された郷村社会史の成果を反映したもので、各地方に散在していた壬辰倭乱当時の個人日記など郷中資料や門中資料が幅広く研究に活用された。したがって、義兵活動についての非常にミクロ的な分析が可能になった。この研究の過程で既存の義兵についての理解に対する様々な問題点が提起された。例を挙げると花園県の禹拝善義兵部隊を分析したある研究では、義兵の主力は単純な農民ではなく官軍から離脱した将軍である「逋将」や落伍軍兵である「散卒」であったことが明らかにされた。あわせて軍糧、武器などは官から積極的に支援され、これは当時の義兵と官軍との不可分性を示すものと理解された<sup>57</sup>。実際、1990年代後半に慶尚右道地域の義兵研究で博士学位を受けたある研究者の次の言及は、1980年代半ば以降の義兵研究の流れをよく示している。

1980年代後半に(中略)筆者が壬辰倭乱を専攻するようになったのは、民主化の熱気の中で、上辺だけ取り繕われていた分野であった壬辰倭乱をきちんと勉強しなかったためだ。当時はほとんど社会経済史に関心が集中していた。その時、筆者は素朴であったが、社会経済史一辺倒の研究は韓国史全体の適切な研究のために望ましくない知的な自慢をしていた。一方で、ひるむことなく、外侵を克服した朝鮮時代の民衆史を正直に明らかにしてみたいという素朴な望みもあった。さらに、戦争の克服に活躍した民の役割や活動を通じて土族中心に理解される朝鮮時代史研究の方向に対して、いささかの注意を喚起したいという考えもあった。(中略)慶尚右道の義兵運動は、壬辰倭乱期に洛東江防御線を確保したという戦争史的な意義がある。(中略)この本が1970年代の意図された国難克服史ではなく適切な壬辰倭乱史研究に基礎となることを切に願う<sup>58</sup>。

この言及を通じて1980年代半ばの社会経済史中心の民衆史的視角から壬辰倭乱研究が矮小化されていた状況に対する批判的認識とともに、筆者がこのような視角を意識しながら義兵研究を始めたことを知ることができる。以降、次第に義兵研究で戦争史的な視角を確保し、国難克服史的な視角の克服が試みられていったことを知ることができる。これは先に言及した1990年代の壬辰倭乱研究が多様な資料の活用などを通じて新たな段階にさしかかり、新たな認識が可能になったことを反証するものだ。

郷村社会史資料以外にも壬辰倭乱当時の人々の戦争体験と個人生活の現実を記録したいいわゆる実記資料などが注目された。最初には国文学の研究者によって整理され、内容が分析されたが<sup>59</sup>、壬辰倭乱当時の時代相をよく反映している資料として注目された後から研究に活用されることもあった<sup>60</sup>。このほかにも当時あまり活用されなかった日本の関連資料が一部紹介され、釜山鎮戦闘の実相と戦争

<sup>57</sup> 李樹健「月谷禹拜善の壬辰倭乱義兵活動;その『倡義遺録』を中心に」『民族文化論叢』13、1992年(이수건 「月谷 禹拜善의 壬辰倭亂 義兵活動; 그의『倡義遺錄』을 중심으로」『민족문화논총』13、1992년)。

<sup>58</sup> 金康植『壬辰倭乱と慶尚右道の義兵運動』慧眼、2000年、3-4ページ(김강식『임진왜란과 경상우도의 의병운동』혜안、2000년、3-4쪽)。

<sup>59</sup> 金泰俊ほか『壬辰倭乱と韓国文学』民音社、1992年(김태준 외『임진왜란과 한국문학』민음사、1992년); 黄浪江『壬辰倭乱と実記文学』一志社、1992年(황패강『임진왜란과 실기문학』일지사、1992년)。

<sup>60</sup> 趙潏来「壬辰倭乱中の湖南地方の社会相」『韓国史学史研究』ナナム、1997年(조원래「임진왜란 중 호남 지방의 사회상」『韓國史學史研究』나남、1997년)。

期間の日本軍の状況について新たな理解の端緒を開いた<sup>61</sup>。実際、1990年代半ば、近世日本文学を専攻した一部の学者が壬辰倭乱に関連する日本のいわゆる朝鮮軍記物の内容と日本人の壬辰倭乱認識の形成についての研究を提出して壬辰倭乱についての客観的理解の幅を広げることができた<sup>62</sup>。これとともに1980年代までそれほど交流がなかった壬辰倭乱を専攻する日本人学者が1990年代に本格的に韓国を何度か訪問し、共同セミナーなどを通じて日本の研究成果と関連資料を紹介したこと<sup>63</sup>も、韓国人学者の中で日本の関連資料についての関心を高潮させた<sup>64</sup>。

次に壬辰倭乱についての多様な分野の研究が現れたことを挙げるができる。1990年代に入って主要な門中や人物中心の壬辰倭乱研究が継続される状況においても、1980年代の戦争史的視角からの壬辰倭乱理解をめざす研究が本格的に現れはじめた。壬辰倭乱期の朝鮮軍の火薬兵器についての研究<sup>65</sup>、朝鮮軍の戦略・戦術<sup>66</sup>、築城<sup>67</sup>など戦争史的視角から要求されていた部門の研究が現れた。これとともに当時の義兵および水軍研究にかくれて注目されなかった官軍と明軍についての研究が本格的に現れ始めた<sup>68</sup>。これは義兵と水軍中心の壬辰倭乱認識が持つ限界を克服し、この戦争が持つ多様な性格に注目し始めたのを示している。特に、明軍の参戦とこれによる政治、経済、社会的影響を分析した韓明基の研究は国史学会における本格的な研究であった点でその後少なからぬ影響を及ぼすようになった<sup>69</sup>。官軍と明軍に対する関心の高まりは、同時に1980年代までの研究に時折

<sup>61</sup> 崔永禧「壬辰倭乱の再照明」『国史館論叢』30、1991年(최영희「임진왜란의 재조명」『국사관논총』30、1991년)。

<sup>62</sup> 崔官「文祿・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)」講談社、1994年(최관「文祿・慶長の役(壬辰・丁酉倭亂)」講談社、1994년); 朴昌基「壬辰倭乱関連日本軍記文学研究」高麗大学校博士学位論文、1999年(박창기「임진왜란 관련 일본 軍記文學 연구」고려대학교 박사학위논문、1999년)。

<sup>63</sup> 北島万次「壬辰倭乱と晋州城戦闘」『南冥学研究』7、1998年(北島萬次「임진왜란과 진주성 전투」『남명학 연구』7、1998년); 北島万次「朝鮮水軍の連勝と日本軍の対応戦術」『壬辰倭乱と李舜臣將軍の戰略戦術』戦争記念館、1998年(北島萬次「조선수군의 연승과 일본군의 대응전술」『임진왜란과 이순신장군의 전략전술』전쟁기념관、1998년); 村井章介「島津史料でみる泗川戦闘」『南冥学研究』8、1999年(村井章介「島津史料로 본 泗川戰鬪」『남명학연구』8、1999년)など。

<sup>64</sup> 関徳植「丁酉再亂時川上久國の描いた南原城図について」『宋甲鎬教授停年退任記念論文集』1993年(민덕식「丁酉再亂時 川上久國이 그린 南原城圖에 대하여」『송갑호교수정년퇴임기념논문집』1993년)。

<sup>65</sup> 朴哲暎「壬辰倭乱期朝鮮軍の火薬兵器についての一考察」『軍史』30、1995年(박재광「임진왜란기 조선군의 화약병기에 대한 일고찰」『군사』30、1995년); 鄭鎮述「壬辰倭乱期朝鮮水軍の武器体系」『学芸誌』4、1995年(정진술「임란기 조선수군의 무기체계」『학예지』4、1995년)。

<sup>66</sup> 李章熙「倭軍撃退の戰略・戦術」『韓国史』29、1995年(이장희「왜군격퇴의 戰略・戰術」『한국사』29、1995년); 朴哲暎「壬辰倭乱期火薬兵器の導入と戦術の変化」『学芸誌』4、1995年(박재광「임진왜란기 화약병기의 도입과 전술의 변화」『학예지』4、1995년); 盧永九「宣祖代紀效新書の普及と陣法論議」『軍史』34、1997年(노영구「선조대 紀效新書의 보급과 陣法 논의」『군사』34、1997년); 姜性文「辛州大捷における権慄の戰略と戦術」『壬辰倭乱と権慄將軍』戦争記念館、1999年(강성문「행주대첩에서의 권율의 전략과 전술」『임진왜란과 권율장군』전쟁기념관、1999년)。

<sup>67</sup> 李章熙「壬辰中山城修築と堅壁清野について」『阜村申延澈教授停年退任記念史学論叢』1995年(이장희「壬辰 山城修築과 堅壁清野에 대하여」『阜村申延澈教授停年退任記念史學論叢』1995년)。

<sup>68</sup> 趙浚来「明軍の出兵と壬辰戦局の推移」『韓国史論』22、1992年(조원래「명군의 출병과 임란전국의 추이」『한국사론』22、1992년); 張学根「壬辰倭乱期官軍の活躍」『韓国史論』22、1992年(장학근「임진왜란기 관군의 활약」『한국사론』22、1992년); 韓明基「壬辰倭乱時期明軍参戦の社会文化的影響」『軍史』35、1997年(한명기「임진왜란 시기 명군 참전의 사회 문화적 영향」『군사』35、1997년); 朴哲暎「壬辰初期戦闘における官軍の活動と権慄」『壬辰倭乱と権慄』戦争記念館、1999年(박재광「임란 초기 전투에서의 官軍의 활동과 권율」『임진왜란과 권율』전쟁기념관、1999년)。

<sup>69</sup> 韓明禧「壬辰倭乱と韓中關係」歴史批評社、1999年(한명기「임진왜란과 한중관계」역사비평사、1999년)。

現れる「正規軍として官軍の存在がほとんどなかった」という否定的認識<sup>70</sup>をいくぶんか克服し始めたことを示している。

#### IV. 2000年代の新たな壬辰倭乱像の構築の努力と挑戦

1990年代の共産圏の崩壊と多元化した情報化社会への転換は、理性による歴史発展と世界史的な普遍性を追求したいわゆるモダニズム(Modernism)に立脚した歴史認識に根本的な変化を要求した<sup>71</sup>。そして、韓国社会を風靡していた既存の民族主義的情緒と論理は、1990年代に本格的に展開された世界化時代に適切に適応できなかった側面が現れた。また、東北アジア地域では民族主義による覇権競争が熾烈に展開し、歴史、安保、領土問題をめぐって葛藤が現れ始めた<sup>72</sup>。これに民族主義史観に立脚していた既存の韓国史理解についての本格的な批判が試みられた。このような様相は壬辰倭乱研究でも同様に表れ、既存の壬辰倭乱認識全般とこれを支えた主要史料、対象範囲などについての本格的な問題提起がなされた。

まず、1990年代後半の世界化の進展によって韓国史認識の幅も相当に拡大し始めた。世界化の進展によって既存のヨーロッパ中心の世界史とは異なり、別の文化圏との接触と交流が非常に頻繁になり、各地域は相互に影響を与えたり受けたりしていたという歴史認識、いわゆる地球史(global history)が登場するようになった<sup>73</sup>。このような歴史認識に基づいて、従来の一国史的な枠内で二国間の関係史で扱ってきた各地域の関係を地域内部全体が相互連動していたというより大きな枠で解釈しようという歴史認識が同時に現れた<sup>74</sup>。このような認識によって壬辰倭乱は東アジア全体の大規模国際戦争という視角をはっきりと確保することができるようになるだけでなく、その戦争の原因を国際的な側面から見ることもできる土台をつくった。最近、民主主義史観に立脚していわゆる一国史的な視角で壬辰倭乱を眺めていた既存の視角を克服し、東アジアで発生した国際戦争という観点から接近しようとする研究が本格的に現れているのはこれを反映する<sup>75</sup>。あわせて、15世紀後半以降、大航海時代の余波でポルトガルとスペインの勢力が東アジアまで押し寄せ、銀を媒介としてヨーロッパと中国が結びつく流動的な国際秩序と関連させて、壬辰倭乱を説明しようとする研究も現れはじめている<sup>76</sup>。

<sup>70</sup> 趙浚来「湖南義兵と義兵指導層の性格」『北岳史論』創刊号、1988年(조원래「호남의병과 의병지도층의 성격」『북악사론』장간호, 1988년)。

<sup>71</sup> 李泰鎮「20世紀韓国史学のモダニズムの特徴」『韓国史市民講座』20、1997年、225-229ページ(이태진「20세기 한국사학의 모더니즘 특징」『한국사시민강좌』20、1997년, 225-229쪽)。

<sup>72</sup> 都珍淳「世界化時代韓国の民族問題と民族主義」『あらたな韓国史の道しるべ』(下)知識産業社、2008年(도진순「세계화시대 한국의 민족문제와 민족주의」『새로운 한국사길잡이』(下) 지식산업사, 2008년)。

<sup>73</sup> 朱京哲「大航海時代:海上膨張と近代世界の形成」ソウル大学校出版部、2008年、37-38ページ(주경철『대항해시대: 해상 팽창과 근대 세계의 형성』서울대학교출판부, 2008년, 37-38쪽)。

<sup>74</sup> 須川英徳「東アジア海域国際経済秩序と壬辰倭乱」『柳成龍の学術と経綸』太学社、2008年、316ページ(須川英徳「동아시아 해역 국제경제질서와 임진왜란」『류성룡의 학술과 경륜』대학사, 2008년, 316쪽)。

<sup>75</sup> 鄭杜熙・李璟珣編『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』ヒューマニスト、2007年(정도희・이경순 엮음『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』휴머니스트, 2007년. 日本語訳は、鄭杜熙、李璟珣編著;小幡倫裕訳『壬辰戦争 : 16世紀日・朝・中の国際戦争』明石書店、2008年)。

<sup>76</sup> 韓明基「壬辰倭乱と東アジア秩序」『壬辰倭乱と韓日関係』景仁文化社、2005年(한명기「임진왜란과 동아

次に、壬辰倭乱に対する新たな認識が試みられている。これまでの研究を通じて壬辰倭乱が我々の敗北として終わったのではなく、7年間の戦争期間中、日本軍が優勢だったのは初期の数か月に過ぎなかったという事実は指摘されてきた。しかし、戦争初期の朝鮮軍の無気力な対応についてはおおむね認定され、その理由を16世紀における朝鮮官軍の弱体性に求める場合が大部分であった。しかし、朝鮮軍の無気力な対応と敗戦と認識されていた壬辰倭乱初期の様相に対して根本的な批判が試みられた。これは壬辰倭乱初期の多様な日記資料などの発掘と活用を通じて可能となった。盧永九は朝鮮軍の初期における敗戦を朝鮮の軍事動員体制の問題と軍事力未確保の側面から認識していたことから脱し、朝鮮軍の初期対応と動員体制は適切に稼働していたが戦術的脆弱性によって敗北が不可避だったと理解した<sup>77</sup>。このような問題認識は、1990年代、官軍に対する理解の幅が広がって戦争史的視角から壬辰倭乱を見る研究視角と関連があるものだった。その後、沈勝求により壬辰倭乱期の動員体制の再編過程についての研究として深められた<sup>78</sup>。

壬辰倭乱初期の様相についての再検討は、おのずから義兵の組織と性格に対する新たな接近を可能にした。盧永九は、それまで義兵の組織が士林の主導下に郷村の住民と賤民など下層民が参与したものとしていた視角から脱し、落伍した官軍の散卒が主力であり、このような準官軍的属性は彼らの活動様相が朝鮮前期の地方軍事体制である鎮管体制に基づいて成り立っていたと主張した<sup>79</sup>。これは以前の新たな義兵認識をさらに積極的に受容し、地方軍事体制と義兵活動とを連結させて義兵の性格についての再検討を促したものであった。

四つ目に、既存の壬辰倭乱関連資料についての批判的考察も最近あらわれた特徴のひとつである。これは過去に活用された史料を新たな問題意識を適用して再解釈しようとする1990年代半ば以降の韓国史学界の傾向を反映するものであった<sup>80</sup>。1990年代前半まで義兵研究に活用されていた各種の倡義録や実記資料を批判的に検討し、当時の義兵の実相を新たに解明しようとした最近の傾向の一端を示している<sup>81</sup>。また、実記類、伝記資料などの壬辰倭乱に関連した各種資料の分析を通じて壬辰倭乱についての認識の変化過程を検討しようとした一連の研究も、関連資料についての批判的考察

---

시아 질서』『임진왜란과 한일관계』景仁文化社、2005년)。

<sup>77</sup> 盧永九「壬辰倭乱初期の様相についての既存認識の再検討—和歌山県立博物館所蔵『壬辰倭乱凶屏風』についての新たな理解に基づいて—」『韓国文化』31、2003年(노영구「壬辰倭亂 초기 양상에 대한 기존 인식의 재검토—和歌山縣立博物館 소장 「壬辰倭亂圖屏風」에 대한 새로운 이해를 바탕으로—」『한국문화』31、2003년)。

<sup>78</sup> 沈勝求「壬辰倭乱の勃発と動員体制の再編」『壬辰倭乱と韓日関係』景仁文化社、2005年(심승구「임진왜란의 발발과 동원체제의 재편」『임진왜란과 한일관계』景仁文化社、2005년)。

<sup>79</sup> 盧永九「壬辰倭乱初期慶尙右義兵の成立と活動領域—金沔義兵部隊を中心に」『歴史と現実』64、2007年(노영구「임진왜란 초기 경상우도 의병의 성립과 활동 영역—金沔 의병부대를 중심으로」『역사와 현실』64、2007년)。

<sup>80</sup> 金滸「我々にとってポストモダン歴史学とは何なのか」『ポストモダニズムと歴史学』プルンヨクサ、2002年、336-340ページ(김호「우리에게 포스트모던 역사학이란 무엇인가」『포스트모더니즘과 역사학』, 푸른역사, 2002년, 336-340쪽)。

<sup>81</sup> 鄭震英「松庵金沔の壬辰倭乱義兵活動と関連資料の検討」『大邱史学』78、2005年(정진영「松庵 金沔의 임란 의병활동과 관련 자료의 검토」『대구사학』78、2005년); 河永輝「火旺山城の記憶—神話になった義兵史の再照明」『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』ヒューマニスト、2007年(하영휘「화왕산성의 기억—신화가 된 의병사의 재조명」『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』, 휴머니스트, 2007년)。



を試みた最近の傾向と密接な関連がある<sup>82</sup>。

最後に、1980年代に提起されていた戦争史的立場からの壬辰倭乱研究が2000年以降の主な研究傾向を形成していたという点を指摘することができる。軍事史専門学術誌である『軍史』51号では「壬辰倭乱の再照明」特集を企画し、壬辰倭乱時の朝・明連合軍の奇兵作戦、亀甲船、朝・明・日の戦略、武器体系、短兵器、晋州城の戦闘など戦争史主題と関連した多様な研究を収録した。1990年代後半以降、戦争史的な視角から壬辰倭乱を持続的に分析してきた姜性文は、壬辰倭乱初期における陸戦の代表的な三つの戦闘に現れた関防と武器を中心とした防衛戦略と戦術的分析を試みた総合的な成果を提出した。この中で、壬辰倭乱の軍事的問題を地形や戦術および武器などに関する科学的接近を通じて新たな理解を試みた<sup>83</sup>。このような傾向から、今後の壬辰倭乱研究のひとつの方向が推測される。

## おわりに

最近の国際情勢はとても流動的に変化している。全世界的な経済危機の到来とともに、脱冷戦以降維持されてきた唯一の超大国アメリカの覇権はかなり損傷した。これによって国家、民族、集団間の離合集散現象が加速化していき、これはこれからもさらに深まっていくだろう。このような状況において東北アジア地域では2000年代に入り、民族主義が強化され、これによって領土紛争、歴史認識問題など様々な葛藤の要素が現れている。これは東北アジアを構成する韓国、中国、日本など主要三か国と世界超大国アメリカが離合集散して覇権を競い合っていることに起因している。このような状況への対応策として、最近一部の論者を中心に国民国家を越えた東アジア共同体建設を要求する主張も現れている。いわゆる「東アジア論」がそれである<sup>84</sup>。このために歴史学界次元では東アジア各国の平和共存のための東アジア共同の歴史認識を構築する必要性が提起されている<sup>85</sup>。壬辰倭乱は現在のように大陸勢力と海洋勢力が韓半島を中心に対立していた最初の歴史的経験として意味がある。したがって、韓国史研究において壬辰倭乱についての研究は他の分野に比べてとても活発なのは事実であり、こ

<sup>82</sup> 盧永九「功臣選定と戦争評価を通じた壬辰倭乱記憶の形成」『歴史と現実』51、2004年(노영구「공신 선정과 전쟁 평가를 통한 임진왜란 기억의 형성」『역사와 현실』51、2004년); 盧永九「歴史のなかの李舜臣認識」『歴史批評』69、2004年(노영구「역사 속의 이순신 인식」『역사비평』69、2004년); 鄭杜熙「李舜臣についての記憶の歴史と歴史化」『韓国史学史学報』14、2006年(정두희「李舜臣에 대한 기억의 역사와 역사화」『한국사학사학보』14、2006년); 鄭震英「壬辰倭乱と妓生の記憶」『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』ヒューマニスト、2007年(정진영「임진왜란과 기생의 기억」『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』휴머니스트、2007년)。

<sup>83</sup> 姜性文「壬辰倭乱初期陸戦と防禦戦術研究」韓国学中央研究院博士学位論文、2006年(강성문「임진왜란 초기陸戰과防禦戰術연구」한국학중앙연구원 박사학위논문、2006년)。

<sup>84</sup> 白永瑞「20世紀型東アジア文明と国民国家を超えて」『創作と批評』106、1999年(백영서「20세기형 동아시아 문명과 국민 국가를 넘어서」『창작과비평』106、1999년); 曹秉漢「東北アジア国際秩序のなかの韓国史」『戦争と東北アジアの国際秩序—潮閣、2006年(조병한「동북아 국제질서 속의 한국사」『전쟁과 동북아의 국제질서』일조각、2006년)。

<sup>85</sup> 河世鳳「東アジア歴史像、その構築の方式と輪郭」『歴史学報』200、2008年(하세봉「동아시아역사상, 그 구축의 방식과 윤곽」『역사학보』200、2008년)。

れからもさらに深化するだろう。

一方、最近東アジア的な次元で共同の歴史認識を確保しようとする研究視角によって、東アジア全体において韓国史の存在感が弱まっているという問題点も現れている<sup>86</sup>。実際、最近の壬辰倭乱についての一部の研究で「一国史的な視角」から壬辰倭乱を眺めていた既存の視角を克服し、東アジアで起こった国際戦争という観点から接近しようとする主張が現れている<sup>87</sup>。その歴史認識の根拠は韓国の民族主義が持つ集団主義、国家主義的、排他的属性についての批判的視角から出たものだ<sup>88</sup>。このような認識の基礎には、東アジア地域の覇権競争と軍備競争による葛藤の問題を単純に東アジア国家の民族主義の問題としか認識しない問題点がある。その本質は、東アジア地域の覇権競争が民主主義の外皮をまとって現れているものだ<sup>89</sup>。そして、一国史的な次元を超えて壬辰倭乱を検討し始めたのは、韓国史学界ではすでに1980年代半ばに確認されていることに注目する必要がある<sup>90</sup>。すなわち、東アジア国際戦争として壬辰倭乱をみる視角はすでに韓国史学界では普遍的な認識であるといえる。それにもかかわらず、最近のこのような論議が再び起こっているのは、これまで韓国の壬辰倭乱関連研究の一部が普遍的歴史像を構築することに失敗したことを反証する。

最後に筆者はひとつの提案をしようと思う。すなわち、忠実な一国史的検討を通じて新たな東アジア共同体を指向する歴史像の定立の必要性がそれである。そして、これに基づいて東アジア三国共同での史料整理作業の必要性を提案する。壬辰倭乱に限ってみても、韓国史学界では1990年代以降、歴史的事実(Historical Fact)に基づいた歴史像の定立に本格的に乗り出している。これを通じて以前と異なる壬辰倭乱像が少しずつ明らかになっている。忠実な一国史的次元の検討の必要性はいまだ有効なものだ。実際、西洋学者の壬辰倭乱研究において資料的客観性が疑われている19世紀中葉の日本の壬辰倭乱通史である『征韓偉略』などが主要な根拠として提示されている点は、新たな東アジア共同体を指向する歴史像の定立のため、役に立つのが難しいのが現実である。代わりに東アジア次元での史料整理作業を通じた比較史的認識の確保が今後の重要な課題になりうるだろう。

<sup>86</sup> 韓明基「交流と戦争」『韓国史の手引き』(上)知識産業社、2008年、395-396ページ(한명기「교류와 전쟁」『한국사길잡이』(상), 지식산업사, 2008년, 395-396쪽)。

<sup>87</sup> 鄭杜熙・이경순編著『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』ヒューマニスト、2007年(정두희・이경순 엮음『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』휴머니스트, 2007년)。

<sup>88</sup> 林志弦「再び、民族主義は反逆だ」『創作と批評』117、2002年(임지현「다시 민족주의는 반역이다」『창작좌비평』117, 2002년)。

<sup>89</sup> 最近の東アジア国際秩序の様相については黄炳惠『米・中覇権競争と我々の対応戦略』統一研究院、2005年(황병덕『미·중 패권경쟁과 우리의 대응전략』통일연구원, 2005년)を参照。

<sup>90</sup> 李泰鎮「16世紀東アジアの歴史的状況と文化」『韓国社会史研究』知識産業社、1986年(이태진「16세기 동아시아의 역사적 상황과 문화」『한국사회사연구』지식산업사, 1986년)。